

文化

新境地に挑んだフランス映画3作

映画

『ベルナデット 最強のファースト・レディ』
『ネネ-エトワールに憧れて-』
『動物界』

民主主義の先駆者という自負と、極右、排外主義の台頭との間で揺れる現代のフランス。世情を捉え新境地に挑んだフランスの3作を紹介。(石塚とも)

『ベルナデット 最強のファースト・レディ』のベルナデットとは、フランス第22代大統領ジャック・シラクの夫人のこと。シラクは極右の国民戦線と決選投票を戦った最初の候補者となるなど、時代の転換点に立つ大統領となった。一方、その妻ベルナデットは、当初、夫やアシスタントを務める次女から低く評価されて蚊帳の外に置かれ、映画によればエリゼ宮の用人人たちにまで軽くあ



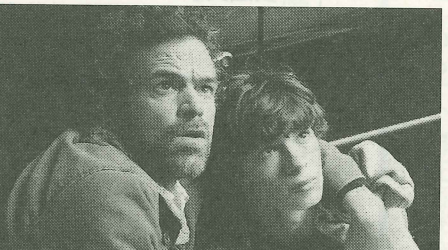
↑『ベルナデット 最強のファースト・レディ』。11月8日(金)より新宿ピカデリーほか全国公開。

「ベルナデット 最強のファースト・レディ」のベルナデットとは、フランス第22代大統領ジャック・シラクの夫人のこと。シラクは極右の国民戦線と決選投票を戦った最初の候補者となるなど、時代の転換点に立つ大統領となった。一方、その妻ベルナデットは、当初、夫やアシスタントを務める次女から低く評価されて蚊帳の外に置かれ、映画によればエリゼ宮の用人人たちにまで軽くあ



『ネネ-エトワールに憧れて-』。11月8日(金)よりTOHOシネマズ シャンテほか全国公開。

く、パリ郊外の労働者の家庭出身でトップバレリーナを目指す黒人の少女の物語。主人公ネネは同じ地元出身の校長を尊敬しているが、肌の色を理由にネネに誰よりもキツく当たるのが校長だった。しかし彼女にも秘密があり…。クラシック・バレエという多様性の前に高い壁が立ちただか



『動物界』。11月8日(金)より、新宿ピカデリー他にて公開。

の芸術を舞台に、世代の違う2人のマイノリティとしての対比を描く、楽しくも骨太な内容だ。『動物界』は2023年、斬新な企画と映像がフランス映画界の度肝を抜き、観客動員100万人を記録した。世界中で、人間が原因不明の突然変異で身も心も各種の動物に変わってしまった現象が起き、主人公親子の息子にも兆しが見え始める。鳥、ヘビ、タコなど、人間とは遺伝的に遠い動物に変わっていく姿は、リアルかつ不気味。一方、その新生物に対する人間の態度にも、美しさと醜さがにじみ出る。新奇な映像は、自然破壊への警鐘、多様性受容の困難など、重層的なテーマに説得力を与える。監督は10年ぶり、2作目の長編となるトマ・カイエ。

『ゴンドラ』

すれ違いから生まれるメルヘン



↑『ゴンドラ』。2024年11月1日(金)より新宿シネマカリテ、アップリンク吉祥寺ほか全国順次公開。

「ゴンドラ」という言葉には、どこか懐かしい響きがある。本作のゴンドラは両手で側面を押しつぶしたような小さな可愛い形で、山の谷間を行き来する。このゴンドラ、ジョージア南部のプロという村に実在し、ジョージアで最も長い距離をつなぐことで知られている。監督と脚本は『ツバル TUVALU』『ブラ！ ブラ！ ブラ！ 胸いっぱい愛を』のファイト・ヘルマー。2台のゴンドラに乗務する2人の女性が繰り広げる物語を、一切のセリフ無しで描いたドイツとジョージアの合作映画だ。

さて、太った駅長が時々かんしゃくを起こす他はさしたる出来事もない平和な山村に、何が起ころのだろう。1本のワイヤロープにぶら下がって行き来するゴンドラ。聞えてくるのは、羊や牛の鳴き声に小鳥のさえずり、風の音、ゴンドラが駅に到着した時のガチャンガチャンという金属音。セリフは無くても、さまざまな音がある。現代の無声映画の名手ヘルマー監督は、「セリフがないから生まれる

映画の瞬間を見てほしい」と語る。本作はコロナ禍で行動制限があった3年前、小規模のクルーで撮影した映画だ。

山のふもとに帰ってきたイヴェアは、ゴンドラに乗務員として働き始める。相棒はニノ。イヴェアが山の下へ向かえばニノは上へ。勤務中は空中ですれ違うだけ。そんな2人の小さな楽しみを威張り屋の駅長が邪魔をしても負けていない。すれ違うなかで手を替え、品を替え見せ合う奇妙なやりとりは、地上の村人たちも巻き込んでいく…

単調な仕事を楽しいメルヘンに変える2人のやりとりに心がほぐれていく作品だ。(殿島三紀)

上を向いて笑おう
NO. 391
太田DOKO



本*
▽金丸弘美/著
理工図書 1900円+税



●『ニッポンはおいしく！』
食にかかわって道をひらく
女性たち

グルメ本ではない。語られるのは、名古屋で有機農産物の朝市を運営する吉野隆子さん、福岡県の道の駅で獲れたての魚を売りさばく伊藤美幸さん、山口県周防大島で島の果実を使ったジャムづくりとカフェを営む松嶋智明さんら、食にかかわって道をひらく女性12人の活動だ。うち新規の就農者も3人。

共通するこだわりは、自身納得のできる作物・産物を消費者に届けること。大規模生産による利益拡大志向ではなく、販売ルートも一般の市場の他、畑の直売所、地域の生協や道の駅、地場商店、通販と多彩だ。そうすることで流通コスト低減、生産者による価格決定が可能となり、収益の安定につながるという。そんな地産地消や産直のメリットをはじめ、危機的状況にある日本の食料事情の中から芽吹く豊かな可能性に気づかせてくれるのが本書の魅力。

この芽吹きを点から面へと広げていくには公的支援の拡充が欠かせない。だとすれば、命を支える農業予算が2兆円に削減され、その対極にある軍事費が8兆円に膨張する国の財政のいびつな構造を是正することは、待ったなしの政治の課題ではないのか。(河田すみ)

▽いちむらみさこ/著
創元社 1400円+税



●『ホームレスでいること』
伝わるのは尊厳と意思

路上や公園で住んでいるのはなぜ？ この本の著者も、20年前から木々が生い茂る公園にテントを張って暮らしている。彼女や近所さんが語る言葉を読んでいると、家を出る、出ざるをえない事情は、人それぞれ本当に違う。そして、自分が抱えている感覚との「つながり」も発見する。

家族の中も学校も職場も、力による支配や暴力があふれ、心も体もえぐられる。逃げ出したい。渋谷、宮下公園のように、ホームレスも「普通の」市民も公園を使えないように追い出して、お金を持っている人だけ利用できるビルを建てるジェントリフィケーションが、各地で進行する。横になれないようにする排除ベンチは、一定の姿勢・生き方しか許さない社会の象徴だ。

著者が、月経用の布ナプキンを作り、お茶会や食事を一緒にしている女たちのエピソードからは、福祉や医療を受けるにしても、そのタイミングや中身は自分で決めたい、私は与えられるだけの対象ではないという尊厳と意思が伝わってくる。助け合う知恵も失敗も。これって、誰にとっても、どこで暮らしていても大事なことだね。(大橋由香子)